http://hokkaido-poland.com/pole.html

POLE

北海道ポーランド文化協会会誌「ポーレ」

第 53 号　2003.9.30

発行
北海道ポーランド文化協会
〒069-0851
江別市大麻園町 28-18
小笠原正明
電話　011-386-3405
FAX　011-387-9016

リレーエッセイ

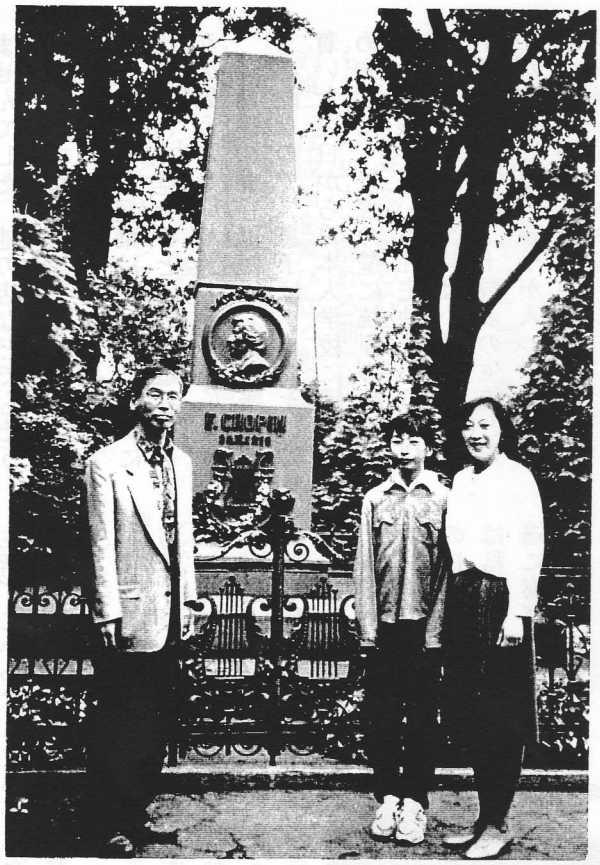
ワルシャワ滞在記

安藤　むつみ

一九九四年十月一日、私達家族三人はそれぞれ大きな不安と少し期待を抱いて十か月間のワルシャワ生活の第一歩を踏み出しました。

主人のワルシャワ大学日本学科勤務に伴ってのことでしたが半年後に卒業式を控え、大好きな桑園小学校の仲間と一緒に卒業したいと言い張る息子を「二月末に母子で帰って来よう」と約束をして半ば無理矢理に連れて行ったのでした。帰国後の中学校への転入も不安でしたしいやがる息子を引っぱって行くのは私達にとっても大きな「賭」でしたが良い事も悪い事も家族一緒に経験したいと願う一心でした。

まず降り立ったオケンチェ空港が新しくきれいなのに驚き、これからの生活は私の予想（かなり覚悟をしていた）とは違うのかもしれないと思いながらこれからの住まいとなるソクラテスホテルに車で向かい走るにつれ、私の気分は急に期待を持った分だけみるみる暗くなっていき部屋に入ってからというもの回りを歩いてみようと言う主人と息子の声をよそに私は猛烈に部屋中の掃除を始めました・・・。そのうち日本から送った荷物も次々届き近くのバザールで必要な物も少しずつ買い揃え、やっとゆっくりお風呂にも入れるようになった（！！）頃急に私の顔一面に赤い発疹が出来ました。どんどん増えていくので大使館内の女医先生に診ていただいたところ水が合わないからミネラルウォーターで洗顔するようにと言われて軟膏をもらっ

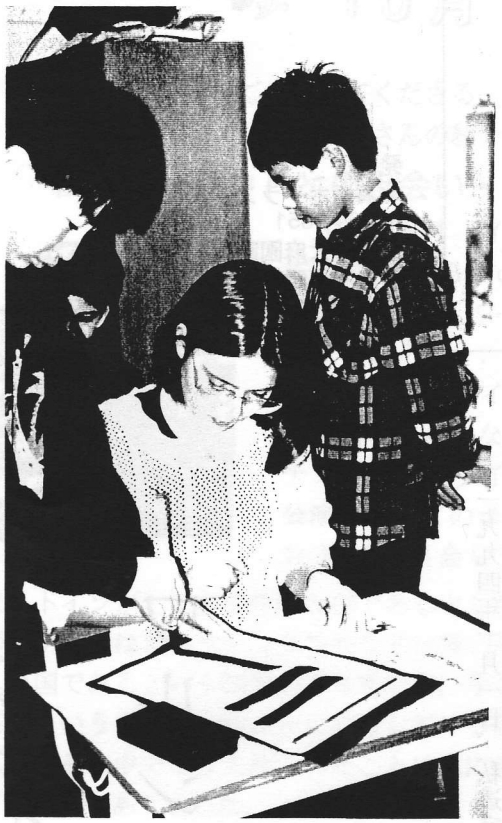


ショパンのモニュメント前で
（ショパンの生家ジェラゾヴァ・ヴォーラ）

たもののとても十か月間ミネラルウォーターで洗顔する気になれず、その後大学の先生が心配してポーランドのドクターの所に連れて行って下さいました。

そこでは数種類の高額なビタミン剤などが出されましたが、必要に迫られて恐る恐る化粧をしたのはポーランドに着いてから三週間ほど経っていました。ちなみに私の知り合った日本人女性の多くは高級ホテルの美容院で髪を整えていたようですが私はあえて近くのバザールの中にある美容院に行きパーマをかける時はお客自らがロットと紙を伸ばして美容師さんに一つずつ手渡すように要求されおかげで退屈することもありませんでした。他の店などでもそうでしたがこの美容室でも私を珍しがる風もなく自然に接してくれましたし、もちろん言葉はダメなので紙に絵を書いて見せると何の問題もなく私の思うようにしてくれました。

（私達の滞在は短いし帰国後の事も心配なので）息子はワルシャワに着いた翌日から日本人学校に通い始めました。校舎の壁に銃弾の跡がいくつも残っている住宅地にある仮住まいの一軒家で当時は小学一年から中学三年までの二十数名の生徒と先生がいました。息子が入った時は同じ六年生が他に三名いましたが、そのうち二名は小学校卒業後ロンドンにある日本の大学の附属高（寄宿舎生活）にいってしまいましたので中学一年の授業は二人の生徒に一人の先生という有難い物でした。



330番小学校との交歓会

学校ではポーランド語の先生と用務員さんを除いては全員日本人の先生と日本の教科書を使って勉強しますが色々な施設や工場などへの見学の他に時々ワルシャワの小学校との交歓会などもあり授業に柔道を取り入れているという珍しい学校（26番小学校別名（加納）治五郎小学校）の日本フェスティバルに招かれた時は私達母親も豚汁などを作って子供達に喜ばれました。食事はコミュニケーションの場をとりもってくれるので主人が授業を持っていたワルシャワ大学日本学科の学生を招いて一緒にお寿司作りしたりその後お返しに学生達がポーランド料理を作ってパーティを開いて下さったりと私も子供や主人を通して楽しい体験を持つことが出来ました。

私はそれまで特にポーランドに興味があったわけでもなくもちろん言葉もわかりませんでしたが、ピアノを学ぶ者にとって避けることの出来ないショパンの音楽に触れるいいチャンスを与えられたと思い滞在中ショパン音楽院に通いました。先生は「言葉が出来なくても問題ない」とおっしゃって下さいましたので通訳もなしで貴重なレッスンを受け通してしまったのですがポーランド語はわからない言っている私に向かって喋ることしゃべること。それでもショパンの曲を通してのことなのでなんとなく・・・自分なりに・・・解釈しポロネーズのレッスンでは先生が背すじを伸ばして実際に歩いてステップを踏んでみて下さりまた私の頼りない演奏にむずかしい顔をしながらも「美しい！！」と励まして下さったりしたおかげでそれまで特別視してなかなか手を出すことが出来なかったショパンの曲を私なりに弾いてもいいのかもしれない思えるようになりました。数回ポーランドの先生のレッスンを受けたからといって急に今まで弾けなかったものが弾けるようになるわけではないのですが、私自身ショパンが二十年間暮らした街を歩いたりポーランドの歴史とショパンの時代を思いめぐらしていくうちにそれまで自分からはあまりに遠い所にいた人間ショパンの心情を少しは察することが出来たような気がします。

私達のワルシャワ生活を振り返ると色んな場面や場所が次々浮かんできますがとても安い料金で何度も出かけることのできた国立オペラ劇場とオペラ・カメラルナと呼ばれる室

内歌劇場のあたりが特になつかしく思い出されます。そしてコンサートの夜の食事はオペラ劇場近くの中華料理かその先にあるケンタッキーフライドチキンだっけ・・・とか。もちろんポーランド料理は美味しいものがいっぱいで特にアイスクリームやソーセージでは帰国後息子が生意気に「日本のはまずい」と言って困りました。ワルシャワではその年第五回目のモーツアルトフェスティバルが六月十五日から七月二六日まで開催されていて、私達は連日のプログラムの中から教会で「レクイエム」を、王宮で室内楽とそしてオペラカメラルナでは代表的な初期のオペラ等も観ることが出来て特に息子の大好きな「魔笛」は三回も観たのですが最後は座席券ががとれず二百円で座布団が渡されそれを階段に敷いて座って観たことも楽しい思い出です。オペラというと大きな劇場で壮大なスペクタルを味わうものだと思っていましたが二百余席の客席のすぐ目の前で小さなステージいっぱいに原色の衣装をつけた歌手達が素晴らしい声を聴かせてくれるのですからはじめは学校の学芸会を観ているよう（ひどい！！）な感覚でしたが私達はすぐにすっかりこのオペラカメラルナに魅せられてしまいました。国立劇場で私達お気に入りの席（ステージを左下に見下ろすのも、安い料金のボックス席）で気楽な姿勢でゆったり観られるのもぜいたくなものでした。

多感な一二・一三才をポーランドの地で暮らした息子は学校の内と外で様々なことを感じ色々な面で頑張り成長したような気がします。私達は熱心に言葉を覚える努力をせず一日一日過ごすだけで精一杯でしたのでポーランドに関する知識はさほど身につかないでしまいましたが悲惨な歴史を重ねてきたポーランドの人々のしなやかな強さ、美しさ、明るさ、気高さをあちこちに戦争の記憶を残している街を歩きながらもしっかり感じました。また滞在中に日本から飛び込んできた地下鉄サリン事件と阪神・淡路大震災のニュースは日本から遠く離れた地に居て様々な事を考えさせられました。

もちろん日本を離れる前の母子の「約束」は成田を飛び立った瞬間に消えていて八月九日日本を離れたときと全く同じように帰りの空港に向かう途中日本人学校に寄って日宿だった先生とフェンス越しに最後の挨拶をし夏休み中にもかかわらず集まって下さったたくさんのお友達に見送られて私達は三人揃ってポーランドに別れを告げました。日本から持っていった子供サイズのヴァイオリンはフルサイズの立派なものに変わり息子の腕にしっかり抱えられていました。その息子も今は大学生になり一人暮らしをしていますが先日帰省した折りに三人一緒に映画「戦場のピアニスト」を観に行き、懐かしい通りを画面に見つけて思わず顔を見合わせたものでした。

自分たちの作ったのり巻き・ちらし寿司を食べる学生たち

第四六回例会報告

穏やかだった シュピルマンの晩年

佐藤泰一さんが講演

去る七月十七日、第四十六回例会として「戦場のピアニスト、シュピルマン」と題した講演会が行われました。講師はヴワディスワフ・シュピルマンの手記を邦訳された佐藤泰一さん。約四十人の参加者を前に、写真やCDを使いながら翻訳のいきさつや苦労、ポーランドを訪れた際のエピソードなどを話されました。

佐藤さんは、映画「戦場のピアニスト」が完成する前にシュピルマンの手記の英訳版をいち早く読まれ、翻訳に着手されました。しかし翻訳に取りかかってみると、手記の雰囲気を伝える日本語を選ぶのは容易ではなく、微調整を何度も重ねて刊行に至ったということです。当初、邦訳が刊行されたときには英語版のタイトル通り、「ザ・ピアニスト」という題名でしたが、その後、映画がアカデミー賞を受賞して話題になった段階で「戦場のピアニスト」と改題して再出版されたという経緯をお話しされました。

映画はほぼ原作手記に忠実ですが、変更されている箇所もあります。例えば映画に登場するシュピルマンの恋人のチェリストは手記には登場しませんし、シュピルマンがドイツ将校の前で弾いたショパンの「ノクターン嬰ハ短調遺作」は、映画では「バラード第一番」に変えられています。

ワルシャワの廃墟から奇跡的に生還したシュピルマンが、その後どのような後半生を送ったのか、その点についても佐藤さんは細かな事実をお話しされました。シュピルマンは十九歳年下の女医と結婚し、二人の息子を持ちました。晩年は歌謡曲の作曲家として名声を博し、ポーランドでは大変著名な音楽になったということです。演奏家として一度だけ日本を訪れたことがあり、そのときには札幌でも室内楽を演奏しています。家庭人としてもピアニストとしても、おおむね穏やかな後半生だったようです。

あまり知られていないのが、シュピルマンの長男クリストファーが日本人女性と結婚して福岡に住んでいることです。先頃、クリストファーが流暢な日本語で父の思い出をつづった「シュピルマンの時計」が刊行されました。佐藤さんはクリストファーとも連絡をとり、三年前、ポーランドのシュピルマンに直接会いにいこうとしました。ところが、ワルシャワのお宅を尋ねてみると、そのわずか前にシュピルマンが急逝したことを知らされました。しかし、八八歳で亡くなるまでのシュピルマンの消息を、夫人からつぶさに聞くことができたそうです。

そのほか講演会ではCDを使い、シュピルマン自身の演奏と、シュピルマンが作曲した子ども向けの歌なども聞くことができ、大変充実した例会となりました。

（三浦　洋）

十五周年記念誌の編集作業進む

北海道ポーランド文化協会は昨年、発足から十五周年を迎えました。それを記念して、現在、記念誌の編集作業がワーキンググループの手で進められています。

内容は、会報「POLE」第五十二号までに掲載された記事の中から約百本を抜粋し、ジャンルごとにまとめて一冊の本とするものです。ポーランドの歴史、美術、音楽といった多彩な文化ジャンルに関する記事のほか、旅行などでポーランドを訪れた人々の随筆、北海道に滞在するポーランド人の手記などが盛り込まれ、ポーランドとの交流記録ともなっています。

収録される文章の端々から、現代ポーランドの被った激変の歴史が伝わってきて、協会の十五年の歩みと二重写しになっているようです。作業が遅滞なく進めば、記念誌は近く完成する予定です。刊行の際には改めてお知らせますので、有料頒布についてご協力をよろしくお願いします。

久し振り、ポーランド語教室の集り

九月十日、以前と同じく水曜日・六時から、懐かしいクリスチャンセンターで、新旧受講者がポーランド語研修会を行った。三十期皆勤の灰谷洋子さんをはじめ、受講時まだ子供さんがなかった柏木さんも、三人のお子さん連れで参加された。

小林講師のリードで、皆さん一緒に声を合わせて懐かしいテキストを読み、マジェーナ講師の朗読テープ、ゴシャ講師の模範朗読を聴いて、ポーランド語の雰囲気に浸った。本教室で勉強された後、更に本場でポーランド語を勉強されてきた柏倉涼子さんの体験談や皆さんそれぞれの思い出を語りながら、あっという間に、楽しい二時間が過ぎた。終わりに、いつものシュワジェヴェチカを唄って散会。

なお、本研修会に前講師熊倉ハリーナさんからメッセージが寄せられました「皆さんお変わりございませんか。私も札幌を離れて四年、東京の生活にも慣れました。いろいろな方々とご一緒できた札幌時代が懐かしい。何時か、お目に掛かれる機会があることを!」と。

（世話人　富山　記）

10月17日に総会

【懇親会で舞をご披露してくださる
竹内実花さんの紹介】

私のポーランドとの出会い・・

1999年8月 ドイツにて開催されたButohシンポジウム・ワークショップ「Ｅｘ．．．ｉｔ！99」というイベントに招聘されたなかシチェチンという町での公演が初めてのポーランドとの出会いでした。ドイツがとても男性的な国であるとしたらポーランドはたおやかな女性的な芯は強いが優しい国であるという印象がありました。そして芸術というものが生活の中に浸透している国でもありその中で受け入れられたことは私にとって喜びでもありました。

また今年は念願でもあったアウシュビッツのほうまで足を運ぶとこができたことは大きな出来事でした。メンタルクリニックでのワークを5年間続けていますが、大きな閉鎖病棟ではもしかしたら、ある意味構造かされた建物の中で「生きた人」としてクライアントが扱われているのだろうか・・あるいはそういった構造の中にもし管理する側となったとき血の通った人として振る舞えるのだろうか・・そんなことを深く考えさせてくれる大きな体験でした。

私は芸術・・その広がりと可能性と静かなそしてたしかな力を感じさせてくれたポーランドという国とこの日本で出会うことができ、このたび北海道ポーランド文化協会で舞うことができることを名誉に思います。

活動歴について・・・・

◆ドイツ、アメリカ、カナダ、ヨルダンそのほか道内外でも活動しまた道内外の音楽家、版画家、書家などとのコラボレーションを展開。

「ポーレ」編集委員会
小笠原正明・柏倉 涼子
小林 美保・佐光 伸一
三浦　洋
☎ 011-386-3405
FAX 011-387-9016
〔連絡先〕 小笠原

今回は17日（金）午後6時30分より、北大構内遠友学舎（モデルバーン東隣）で開催されます。

総　会　午後6時30分より
懇親会　午後7時より。
場　所　北大・遠友学舎
（札幌市北区北18西7 ☎ 706-7455）
地下鉄南北線北18条駅下車　徒歩3分
（同封のリーフレットをご参照下さい）

在札ポーランド人をご招待します。
また、懇親会では今年ポーランドでの公演で好評を得た、舞踏家 竹内実花さんにパフォーマンスをお願いしています。
ご家族・お友達をお誘いの上お越し下さい。

会　費　2千円
（軽食・ビール/ソフトドリンク付）

※　ご出席は同封のハガキで至急お知らせ下さい。

※　ご欠席なさる場合は同封ハガキの委任状部分にご記入の上、必ずご投函下さいますようお願いします。

お車でお越しの方は

エルムトンネルの副道を進み遠友学舎前（5台分）の駐車場に止めてください。
途中遮断機がありますが、そこで駐車券を発券し、氏間にお渡し下さい。
ご不明の点は rin@jp-d.ne.jp
090-2875-7981（氏間）

◆先日は札幌室内歌劇場のオペラでの第二章の衣装デザイン振り付けおよび出演で高い評価を受ける。
◆日本ダンスセラピー協会正会員であり、日本ダンスセラピー協会年次大会でのワークショップ指導アメリカダンスセラピー協会でのワークショップ指導はじめ心理学関係のワークショップ指導など。
◆森田一踏（葛西俊治氏）と身体心理学的な見地によるボディラーニング法による舞踏ダンスメソッドの開発。
◆メンタルクリニックのディでのリラクセイションの指導を5年間担当。
◆竹内実花ＢＵＴＯＨ研究所を主宰し今年4月西区二十四軒3条4丁目にスタジオを開設

☎011-616-7281　/　FAX 011-671-5860
http//www.ne.jp/asahi/butoh/itto/mika/

POLE 第 53 号(2003.9.30)目次

安藤むつみ「ワルシャワ滞在記」・・ 1
「〈第 46 回例会〉報告・穏やかだったシュピルマンの晩年～佐藤泰一さんが講演」(三浦洋)・・・・・・・・・・・・・・・ 4
15 周年記念誌の編集作業進む、「久し振り、ポーランド語教室の集り」(2003.9.10)(世話人:富山信夫)・・ 5
第 17 回総会・懇親会(2003.10.17)のお知らせ、懇親会で舞をご披露してくださる竹内実花さんの紹介
「私のポーランドとの出会い…」・・ 6